

## トニー・ルイスの思い出

鈴木治郎（旧遠洋水産研究所浮魚資源部長）

先日友人からトニー・ルイスの訃報を知らされた。トニー・ルイス（Antony D. Lewis）、彼は、フィールドワークを好み、多くのマグロ研究者や漁業者に愛された。そして、いつもにこやかにしている好男子でもあった。私と同世代の研究者だったので、彼とは長く関わりがあり、彼の業績や共に過ごした楽しい思い出等を述べて彼をしのんでみたい。



故トニー・ルイス（2010年：  
ベトナムのレストランで  
ウエイトレスに囲まれて  
ご機嫌）

## SPCの三羽鳥の一人

WCPFC（中西部マグロ類保存委員会）がマグロ類の資源評価を委託しているのが、SPC（Secretariat of the Pacific Community：太平洋共同体）のOFP（Oceanic Fisheries Programme：海洋漁業計画）である。SPCにおける資源評価技術は、世界的に高いレベルにあり、私が現役のころは、資源解析（ジョン・ハンプトン）、資源生物調査（トニー・ルイス）、統計調査（ピーター・ウィリアム）の3部門の優れた指導的研究者が緊密な連携のもと活躍していた。彼らは、まさにSPCの豪州人三羽鳥と言える。トニー・ルイスとは彼がカツオの遺伝学的研究で学位を取ったころに、アメリカのサンデエゴにあるIATTC（全米熱帯マグロ委員会）事務局で会ったのがその後の長い付き合いの始まりである。旧遠洋水産研究所にしばしば来所し、決まり文句の“ヘンナ外人”を連発して場を和ませたものだった。私が研究所に配属されたころに、WCPFC海域のカツオ資源量は300万トンという衝撃的な推定が出された（[8739.PDF \(noaa.gov\)](#)）。それまでは、カツオの資源状態はほとんど不明であったし、当時は、この推定値があまりに大きかったことから、その推定値の信ぴょう性に懐疑的な研究者もいた。しかしながら、その結果は引き続き行われた数回の調査の結果とともに、研究者間で広く受け

入れられている。

### トニー・ルイスは大規模標識放流の実施を遂行

さて、この衝撃的論文のデータとして使われたのが、大規模標識放流の結果であり、その後数回行われた大規模標識放流事業で継続して中心的役割を果たしたのがトニーであった。先に述べたように、1970年代中頃までは、中西部太平洋のカツオに関する資源生物学的情報は断片的なものしか存在しなかった。ところが、日本のカツオ竿釣り漁業が熱帯域にまで進出し、さらに自然漂流物に付くカツオやキハダ幼魚を漁獲するまき網漁業が発達してカツオの漁獲量が急激に増加し、カツオ資源の将来の持続生産性についての懸念が急速に高まっていた。まだWCPFCが出来る前のことである。これを受けて関係する研究者間の論議の結果、カツオの資源量や回遊等を明らかにするために選ばれた手法が、SPCと日本が主導した大規模標識放流である。ここで言う大規模標識放流とはこれまで各海域で散発的に行われてきた標識放流とは異なり、広大な時空間をできるだけカバーして計画的・集中的に大量の標識放流を行うものである。このためには、少なくとも10万尾単位のカツオに標識する必要がある、そのために、まず、標識放流専用船が必要でそれをチャーターすることになった。この目的のために選ばれたのが、日本のカツオ竿釣り船の第5初鳥丸で、調査は1979年から開始された（東北水研ニュース：[tnfri.fra.affrc.go.jp/tnf/news19/hayasi.htm](http://tnfri.fra.affrc.go.jp/tnf/news19/hayasi.htm)）。なお、この標識放流調査に対する日本の意気込みは強く、研究者ばかりでなく、水産庁の若手職員もこの調査に数か月にわたって乗船参加した。次に問題となるのは、撒き餌となるイワシ類等の小型魚をどう調達するかである。長期にわたって大量の撒き餌を生かしておくことは不可能である。したがって、現地で餌魚を調達するしかない。これまでの調査で熱帯域では、撒き餌となる小型魚が豊富に存在することは分かっていたが、それを効率的にとる方法がなかった。そこで登場したのが、トニーがお気に入りの棒受け網漁法である。これを使って、現地で必要に応じて、撒き餌用の小型魚をリーフの中で漁獲することが出来た。かつて、私が標識放流に彼と一緒に参加したときに、彼は、この棒受け網漁法の効率の良さと、それを発明した日本人にしきりに感心していた。

### いくつかの思い出

彼は中西部太平洋の島嶼国の事情に詳しく、現地の研究者とともにたびたび乗船し、熱心に効率的で確実な標識作業を彼らに伝授したので、みんなの信頼を得ていた。この他に、WCPFC海域で大きな漁獲をあげているが漁獲統計や生物データ収集が不十分であるベトナム、インドネシア、フィリピンにおける調査旅行に何度か彼と同行したことがある。何処に行っても彼はニコニコしながらユーモアに富んだ会話で人気があった。調査は順調に進み、行く先々で我々は歓待され、各地での調査の打ち上げには、関係者がそろって会食したものであった。その都度彼の指示で差し入れ用の上物のウイスキーを買いに行かされたのが私であった。なかでも、ベトナムでの印象が深い。ベトナムでは戦争で男手が少なかったこともあり、女性が水揚げ時の力仕事を楽々となしているのが印象深かった。また、ビールに専用の棒状の氷を入れてく

れ、これで長く一杯を飲み続けることが出来ることを教えてもらった。最初は、ビールが水っぽくなるのではないかと心配したが、意外とそうでもなく、日本に帰ってからもこのやり方で飲んだりしている。また、ベトナムでは、ビアホイというビール酒場がある。大きな金属製の樽からホースでジョッキになみなみと注ぐ豪快な飲み方でトニーとピーターとともにひたすら飲み続けた。これだけのビールを飲んだことは後にも先にもない。

もう一つの思いでは、太平洋クロマグロの0歳魚に関する調査にフィリピンまで出かけたことである。彼は、フィリピンで0歳のクロマグロが漁獲されていると言い、そんなことはクロマグロの生態上あり得ないという私と論議になった。そこで、どちらが正しいか賭けをすることになり、当時の旧遠洋水産研究所の研究者達と各地で現地調査を行ったのである。賭けは私の勝ちであった。この調査に彼は同行しなかったし、結果を直接彼に知らせることはなかった。あの世で彼に再会したらこの結果を報告し、山ほどある思い出を語り合いたいと思う。それまで、しばしさらばトニー。